ちょっといい話

火論 ka-ron

玉木 研二

里の秋

災害地の人々を、地域のラジオ局がきめ細かな情報発信や温かい語り、音楽で励ます。北海道の地震でも見られた。東日本大震災での活躍も記憶に新しい。

敗戦直後にはラジオから流れた一曲の童謡「里の秋」が疲弊した人々の心に染みた。

「静かな 静かな」で始まるこの歌は、子が母と2人、秋の夜にクリの実をいろりで煮ながら遠い父を思う。

澄明な曲調とともに農村の秋を情緒豊かに歌い上げた詞として親しまれるようだ。だが元は日米開戦時、子が出征した父を思い、武運を祈り、自分も続くというような内容だった。作詞は千葉県の小学校教員、斎藤信夫（1911～87年）。「星月夜」と題し、童謡作曲家の海沼実（09～71年）に託した。

そして敗戦から4カ月の45年暮れ。NHKは神奈川県の浦賀港に大勢の復員兵を乗せた船が着くのに合わせ、2時間15分の番組「外地引揚同胞激励の午後」を企画する。

その中で、少女童謡歌手、川田正子（34～2006年）が新曲を港で歌って迎えるという趣向で、海沼に曲を依頼した。本番までわずかな日しかない。海沼は「星月夜」に思い至り、斎藤を呼んで、詞の1、2番は生かし、軍国少年調となる3番以下は書き直すよう要望する。

戦時の教育に責任を痛感する斎藤は教壇を去ろうとしていた。詞の改作に苦悶したらしい。父の無事な帰還を祈る詞にし、12月24日の本番ぎりぎりに間に合わせた。

浦賀からの中継が技術的な不具合で中止になったことも準備には幸いしたかもしれない。東京の放送局スタジオで、川田は歌った。

放送中に問い合わせや感謝を述べる電話が引きも切らず、彼女は番組内でもう一度歌うよう指示された。局始まって以来のことだった。この番組のための1曲が、今に続く大ヒットになった。

心身に深く傷を負う復員兵やその家族、離散や死別で支えを失った人々。歌はその中に分け入った。

いや、戦争に限らず、あらゆる場で傷つく人々に通じ、心動かす普遍性がこの小曲にあるのだろうか。

放送があった24日の毎日新聞。1枚表裏2ページの紙面に暗い記事があふれる。東京に横行する拳銃強盗団。家出した12歳の少年強盗。焼け跡の壕舎に憎い初雪。殺人。深刻な食糧不足に閣僚夫人も相談窓口の列に……。

先行き見えぬ不安に生きる時代に響くとすれば、今なお古くはならない「里の秋」である。

（客員編集委員）

2018・10・16